

今日からできる

コロナワクチン解毒の方法

井上正康

日本国民の約8割が接種した新型コロナウイルスワクチン「mRNAワクチン」は、その重篤な副作用が問題視されている。にもかかわらず接種は続けられ、新ワクチン「レプリコンワクチン」の接種も始まった。もはや自分の命は自分で守るしかない。安全で確実にワクチンを解毒するデトックス法とは？

写真提供：shans/PIXTA（ピクスタ）

歴史から分かるウイルスとの戦い方

今回のコロナ禍で使用された「mRNAワクチン」には、基本的な設計ミスがあることが世界中の医学論文ですでに証明されています。しかし世界で唯一、日本だけが未だに国民に打たせ続けています。なぜそんなことが起こっているのかを理解するために重要なのは歴史です。今から79年前に太平洋戦争が終わった頃の日本では結核が国民病でした。結核は「結核菌」が原因ですから、抗生物質などで簡単にコントロールできると考えられていました。

じつは、その時取りこぼしたのがウイルスだったのです。ウイルスは遺伝子とタンパクと脂でできていますが、



いのうえ まさひろ
1945年広島県生まれ。岡山大学大学院修了（病理学）。インド、ベルギー、海峽植民地（感染症学）。熊本大学医学部助教授（生化学）。東京大学医学部助教授（内科）。大阪大学医学部客員教授（分子生物学）。大阪市立大学客員教授（分子生物学）。2011年大阪市立大学名誉教授。京都大学副学長。キリン堂ホールディングス取締役などを歴任。現在、健康科学研究会理事長。現代通説 塾長（一社）ワクチン問題研究会理事。WHOから命を守る国民運動共同代表。

世界を変えたウイルス 5年目の真実

その遺伝子配列を調べると我々の遺伝子の3割ほどは太古にウイルスからもらったものだということが分かります。つまりウイルスは、我々の「ご先祖様」なのです。そして残りの7割は、大腸菌のような身近な細菌からもらっていることが分かっています。

私たちは、その遺伝子を使い回しながら人間に進化してきたわけですから、「ゼロコロナ」の世界は人間の遺伝子がなくなった状態でしか実現し得ないのです。つまり、人間にはウイルスと共存する以外の選択肢はないのです。

人類とウイルスとの歴史を紐解くと、今から130年前に100万人が亡くなった「ロシア風邪」というパンデミックがありました。じつはこれが「元祖コロナウイルス」だということが分かっています。しかしワクチンも無いのに1年で自然収束し、今回の新型コロナウイルスと同様に突然変異しながら「風邪のウイルス」として今日まで生き延びてきました。

その30年後に「スペイン風邪」という本格的なパンデミックが発生しました。これも2年目は解熱剤のアスピリンを過剰投与していたことによって起こった薬害であることが分かり、それに気付いた連合軍が投与をやめた

ところ3年目には自然収束しました。この2つの大きなパンデミックは、「人が余計なことをしなければ約1年で収束すること」を教えてくれる重要なメッセージです。

感染症の歴史

紀元前430年頃	古代ギリシャで疫病が流行（病名は不明）
100年代	ローマ帝国で疫病が流行（病名不明）
200年代	ローマ帝国で疫病流行（病名不明）
540年代	ヨーロッパでペスト流行
735年～737年	日本で天然痘流行
1347～1352年	ヨーロッパでペスト再流行・2億人が死亡
1520年～	中米・アステカ王国で天然痘流行・5600万人が死亡
1525年～	南米・インカ帝国で天然痘が流行・先住民の人口が9割減
1665年	ロンドンでペストが流行
1720年	南仏・プロバンス地方でペスト大流行
1817年～1823年	世界的にペスト流行
1889年～1890年	ロシアかぜが世界的に流行・約100万人が死亡
1918年～1920年	スペイン風邪流行・全世界で死者5000万人以上
1957年～1958年	アジアかぜ大流行・約200万人が死亡
1968年	香港かぜ大流行・約100万人が死亡
1980年代～	エイズが世界的に蔓延・これまでに4230万人が死亡
2003年	SARS 流行
2009～2010年	新型インフルエンザが世界的に流行
2012年～	MERS 流行・患者の約35%が死亡
2020年～	新型コロナウイルス感染症が世界的に流行

じつは、我々の免疫力こそがウイルスに対する唯一の武器なのです。

「mRNAワクチン」の実態

コロナウイルスを包んでいるスパイクタンパクが「血管壁のACE2受容体」に結合すると血管障害で血栓が生じ血流が遮断されます。「新型コロナウイルス感染症」の病態は「肺炎ではなく血栓症と血管の病変」なのです。「mRNAワクチンの副作用」でも同様の病態が起こります。「mRNAワクチン」は抗体を産生させてウイルスを中和すると説明されていますが、遺伝子が作るスパイクは血栓症を生じる毒物なのです。

通常ワクチンは2回接種しますが、日本では7回も打った人もおり医学では考えられない異常なことが暴走しています。そのため免疫系の異常反応によりスパイク産生細胞が次々に殺される状態になります。私が最も危惧していることはこの事実です。

ワクチンを打った人が亡くなるのは偶然と言われていますが、「打った翌日としばらくしてから死者数がピークになり、その後数週間ではとほりが冷める現象」はワクチンが主因です。免疫の反応性は個人差が大きく、

感受性の高い人（High Responder）は初回で亡くなり、少し鈍感な人（Low Responder）は数回目に亡くなり、岸田前首相のように7回打ってもピークともしない方（もし本物を接種していればの話ですが……）は超鈍感力（NonResponder）の持ち主なのです。そのためワクチンは副作用の解析が非常に難しく、「証拠を残さない毒薬」と呼ばれています。

ワクチン粒子は異物であり、血中に入ると約3割は肝臓と脾臓に取り込まれます（厚労省データ）。次に多く取り込まれるのが骨髄です。骨髄は2・5kgの赤血球を作る人体最大の細胞製造工場で、未分化な幹細胞がたくさんいます。そこに遺伝子ワクチンが取り込まれると骨や血液細胞の代謝がおかしくなり、白血病の原因にもなります。最近、杖をついた人が非常に目立つようになったのは、ワクチンで骨髄が障害された方が多いことを反映しています。その次に多く集まるのが女性の卵巣で、重量当たりでは他組織の20倍以上も蓄積します。次に多く集まるのが副腎、そして男性では睾丸です。「次世代をつくる卵巣と睾丸で大量のスパイクが産生されること」により、自己免疫反応で幹細胞が殺されて不妊症が激増する可能性が危惧されています。

世界を変えたウイルス 5年目の真実

日本における
新型コロナウイルスワクチン接種回数

	接種回数	接種率(%)
全体		
1回目	104,753,261	80.4
2回目	103,464,961	79.5
3回目	86,697,731	67.1
4回目以上	141,277,388	—
総接種回数	436,193,341	
うち高齢者(65歳以上)		
1回目	33,395,427	93.1
2回目	33,320,953	92.8
3回目	32,995,708	91.9
4回目以上	93,760,098	—
総接種回数	193,472,186	
うち小児(5歳～11歳)		
1回目	1,769,951	24.5
2回目	1,716,012	23.8
3回目	736,008	10.2
4回目以上	320,058	—
総接種回数	4,542,029	
うち乳幼児(生後6カ月～4歳)		
1回目	193,727	4.5
2回目	180,660	4.2
3回目	144,530	3.4
総接種回数	560,634	

※2024年3月30日まで
出典：厚生労働省ホームページ

「チンは危ないという事実」が海外では常識となつてゐるため、これに代わる次世代型ワクチンとして「遺伝子が自己増殖するレプリコンワクチン」が作られました。しかしベトナムの治験で失敗して米国でもベトナムでも承認されていません。武見敬三前厚労大臣がそれを無視して世界で

「mRNAワクチン」のリスク

第5波までの新型コロナウイルスは「ACE2受容体」のある血管壁に選択的に感染します。一方、脂膜をポリエチレングリコールでコーティングされたmRNAは、すべての細胞に効率良く取り込まれ1年半以上も分解されずにスパイクを作り続けて血中に放出します。世界で日本人だけが何回も頻回接種したため、全身の細胞が自分の免疫系で攻撃される「自己免疫疾患」が増えています。このような免疫異常で免疫系が抑制されるとエイズのように感染しやすい病態になります。これには「Vaccine-induced AIDS = V A I D S (ヴァイズ)」と

いう新しい病名が付けられています。「V A I D S」によって带状疱疹などの日和見感染症が起こりやすくなっています。

2021年に接種が始まってから毎年ものすごい種類の病気が発生し、特に超過死亡数が激増しています。遺伝子で病原体のスパイクを産生している細胞は「感染細胞」と見做され、病原体の種類を問わずに同様の自己免疫病態が誘起されます。政府は全てのワクチンをmRNA型にしようとしています。が、「mRNA型ワクチンは猛毒なので接種してはならない」ということが、半世紀間も自由に研究させていただいた筆者の「遺言」です。

初めて承認しました。これは後に大きな責任を問われることになります。

「レプリコンワクチン」を接種すると、遺伝子がスパイクタンパクに包まれた「エクソソーム」が生じますが、これは、疑似ウイルスと考えられます。それが体内ではかの細胞に感染したり、他者に伝搬したりする可能性が危惧されています。この「レプリコンワクチン」を国民が打ってしまった場合、どうすれば悪影響を軽減できるかが重要になってきます。

今、「大半の医者は何が起こっているか分からない」というのが実状です。ワクチン後遺症を治療できる医者は世界的に少ない。日本では「全国有志医師の会」がどうすれば治せるかを毎週の勉強会で考えていますが、まだ確実な答えは出ていません。本記事では、ワクチン後遺症患者が、自分でできる安全で安価なデトックス法をお伝えすることが主題です。

「ファステイング」で、ワクチン・デトックス。

自分でできるデトックス法の基本は、正しい知識で簡単かつ安全にできることです。ワクチンの接種者が近くに来ると気分が悪くなるなど「シェディング」が危惧さ

れていますが、それも含めて影響を軽減する方法として一番手軽に安全にできるのが食事をコントロールすることです。

生物が飢えてくると共食いをするように、人間も食事をしないと体内で細胞同士が共食いをする。が分かっています。元気な細胞と障害された細胞が戦うと、障害細胞が食べられてしまいます。これが「オートファジー」という機構であり、大隅良典東京工業大学教授がノーベル生理学・医学賞を受賞したメカニズムです。「オートファジー」は絶食時に起こりやすくなります。イスラムのラマダンや永平寺などの、断食の業も、じつは感染症対策で進化してきた生存戦略なのです。

体内でスパイクが作られると抗体が結合し、それを免疫細胞が認識して攻撃します。抗体が結合した細胞は白血球のマクロファージに貪食されます。障害細胞が食べられてアミノ酸などに分解されると、新しいタンパクや細胞に作り替えられ「栄養学的リサイクル」が起こります。これが「オートファジー」の意義であり、新しく元気な細胞に生まれ変わります。「ワクチンで障害された細胞をオートファジーで排除し、新しい元気な細胞を再生すること」が可能になります。本格的なファステイン

世界を変えたウイルス 5年目の真実

グでは数日間も断食しますが、これは専門家の指導を受けて行う必要があります。「今日から安全に確実にできるデトックス」として私が勧めるのは「16時間ダイエツト」です。前の晩は夜8時頃までに夕食を済ませ、朝食は野菜のスムージーやオレンジジュースなどで、水分とミネラルを。補給し、お昼に、食物繊維の多い食事。を取ります。これで16時間ファステイングができます。朝食を抜くだけで大きなリスクは無く、糖尿病やメタボの対策にもお勧めの方法です。しかも朝食を抜くわけですから、安くつきます。

重点的に取りたい栄養素

新型コロナウイルスの特効薬である「イベルメクチン」は、第5波のデルタ株までには良く効く薬です。しかし、ノド粘膜に感染するオミクロン株に対する効果は低いことが知られています。そこで私は安全な天然食材として、お茶の「カテキン」、カレーの「クルクミン」、柑橘類の「ノビレチン」などを勧めています。いずれも日常的に摂取している安全なものです。カレーの「クルクミン」はポリフェノールで、「イベルメクチン」が結合するスパイクのポケットに入り込みACE2との結合を阻害します。

そのため第5波デルタ株までの感染症やmRNAワクチンの後遺症である血栓症や血管障害の抑制に有効です。

これらの中ではお茶のカテキンが最も強く作用します。お茶を振る舞う際に「まずは一服」と言いますが、この「服」は「頓服の服」であり、古くから親しんでいたお茶は漢方薬だったのです。体を守る有効成分は食物中にたくさんあるのです。

例えば日本人が食べる納豆には血栓を溶かす「ナットウキナーゼ」というタンパク分解酵素があります。通常、タンパクは胃腸で分解されるので血中に入らない」と誤解されていました。私は大学院生時代に「タンパク分解酵素の一部は活性型で血中に吸収されること」を研究し証明しま

推奨する3つの化合物

カテキン	主に緑茶に含まれる苦味の成分。ポリフェノールの一種。抗酸化作用・抗菌作用・抗アレルギー作用などがあると言われる。
クルクミン	スパイスの一種でショウガの仲間。カレーに用いられる。日本では「ウコン」の名で親しまれている。抗酸化作用があり、肝機能向上効果も期待できる。
ノビレチン	柑橘系の果実に含まれるフラボノイドの一種。アンチエイジング効果や抗アレルギー効果などが期待できる。

した。「ナットウキナーゼ」などのタンパク分解酵素の一部は食事やサプリメントで摂取しても血中に吸収されて作用するのです。納豆は朝食食べる人が多いですが、コロナやワクチン後遺症が気になる方は晩ご飯に2パック食べると良いでしょう。サプリメントを利用するのもお勧めです。ただし納豆は血液凝固に問題があり「ワルファリン」などの血栓溶解剤を飲んでいる方は注意する必要があります。

「ポリフェノール」と「食物繊維」の健康効果

「ポリフェノールは抗酸化物質」と考えられていますが、じつは「ポリフェノールの多くは酵素に結合し活性を制御すること」が重要な作用なのです。マイナス荷電が6個もある「フルボ酸」もその仲間で、プラスに荷電したコロナのスパイク部位に結合して感染を抑制します。これはシエディングなどにも有効なことが分かっています。「海の生物を育てるには上流の森を育てよ!」との名言がありますが、樹木が朽ちると微生物の糸状菌に食べられてさまざまな代謝産物になります。その中の一つが「フルボ酸」で、さまざまなミネラルを結合して川から海へ下っていきます。森から海にミネラルが運ばれると

豊かな海藻や貝類が育ち、これらを食べると必要なミネラルを補給できます。昆布は、マイナスに荷電したアルギン酸。などを多く含み、これに水が結合するのでヌルヌルするわけです。このマイナス荷電にさまざまなミネラルが結合するため、昆布で出汁を取るとミネラルも摂取できます。出汁を取った後の昆布も捨てずに煮物などにすると食物繊維が取れます。水に溶けやすい海藻類の食物繊維と溶けにくい根菜類の食物繊維を約1対2で摂取すると腸内細菌のバランスが良くなり、便の量と質が改善されます。

野菜や海藻類でバランス良く栄養価を保持し、発酵食品で腸内の微生物代謝をサポートできます。食物繊維は胃や小腸で分解されないため大腸にたどり着き、これを腸内細菌が食べると酢酸、プロピオン酸、酪酸などの「短鎖脂肪酸」が産生されます。酢酸は腸内のpHを下げて腸のぜん動運動を促進し便秘を解消します。プロピオン酸は腸組織のエネルギー源になります。腸組織のリンパ球や脂肪細胞には酪酸に対する特異的受容体があり、酪酸がこの受容体に結合するとリンパ球は炎症（戦争）を起こさなくなり、脂肪細胞は脂を蓄積しなくなります。食物繊維を食べれば脂肪組織が肥大せず、リンパ球も無駄

世界を変えたウイルス 5年目の真実

な戦争（炎症）を起こしません。このため、食物繊維を取るとスリムで炎症のない健康体になるのです。

調理のスパイスは感染症対策で進化してきたものです。生の刺し身を食べる時にはワサビが不可欠で、冷蔵庫のない時代には腐りかけた肉をコショウやニンニクで殺菌していました。ワサビもコショウもニンニクも毒物ですが、それをさじ加減して使うことで病原体を排除し安全な食べ物にすることが出来ます。それを美味しいと感じる味覚の持ち主が感染症から逃れて生き残ってきたのです。あらゆる国や地方の調理法は感染症対策として進化してきた生存システムなのです。

健康な体をつくるために

ワクチンの副作用のない方もこういった食事法を実践することで、元気な体をつくることができます。また、サプリメントを利用する方法もあります。抗酸化物質やマルチビタミンの補給でもデトックス効果を期待できます。基本は腸内細菌のバランスを整えることであり、これが免疫の多様性を広げる最重要ポイントです。食物繊維やサプリメントを利用しながら過食をやめて適度に断食も取り入れることで、約70%の免疫系復元力を強化できま

す。残り30%の免疫力は脳がコントロール（脳免疫統合系）しています。そのため、不快な思いは免疫力を下げるので禁物です。気の合う仲間と一杯飲みながら楽しく集うことが健康な免疫的生活です。ステイホームなどとは逆に、楽しく集まることが免疫力を高める重要な方法なのです。

握力・顎力・歩行力も大切です。手は神経密度が最も高いので、手を使うことで脳の3割が活性化されて脳血流が改善されます。顎力は噛む力であり、噛み応えのある食物繊維などを食べたり、おしゃべりで脳が活性化されます。歩行力は「お天道さまの下を30分以上歩くこと」で、免疫反応に必要なビタミンDが皮膚で合成されます。「握力・顎力・歩行力」によって、脳の血管が柔らかに維持され、脳動脈のマッサージにもなります。

このように日常生活の中で体を使いながら、免疫を強化しましょう。以上のことを2023年の暮れに上梓した『きょうから始めるコロナワクチン解毒17の方法』で打ってしまったワクチンから逃げきる完全ガイド』で紹介しています。ワクチンで体調を壊された方には、このように安全な方法で健康を取り戻していただきたいと願っています。